

ふれあい体験学習における中学生と乳幼児との交流に関する研究 —「お世話体験」と「あそび体験」を通して—

廣兼 慎¹・七木田 敦²

A Study of Interaction between Junior High School Students and Infants in “FUREAI” Experience Learning through “Childcare Experience” and “Playing Experience”.

Makoto HIROKANE¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: This study attempts to clarify what kind of effect the contact experience learning will bring to junior high school students and infants and consider how we can make meaningful exchanges with junior high school students and infants if we do the contents of infants' ages and contact experiences learning. Furthermore, we will create an experienced contact experience model. In this study, we use word that “FUREAI” experience learning. As a reason, when using “touching” or “contact”, contact with a simple body is emphasized. However, it is thought that “FUREAI” experience learning is not only simple body contact, but also exchange between middle school students and babies including distance and mind.

Key words: parental preparation, babies and infants, junior high school students, “FUREAI” experience learning

1. 問題と目的

子育てに関して学習するための教育や親性準備教育として、日本の学校では、乳幼児と接する体験の1つに「ふれあい体験学習」が存在する。学校の授業として実施される乳幼児とのふれあい体験学習は、家庭科の授業における保育の体験学習や、総合的な学習の時間における職場体験として行われることが大半である。しかし、授業外でも地域のボランティアや社会教育の一環として児童館や公民館などで行われる場合もあり、それぞれの目的や形態は様々で多種多様である（伊藤 2007）。その中でも、必修教科として生徒全員が履修する中学校の家庭科（文部科学省 2008）のふれあい体験学習における中学生にとっての体験学習の教育的意義を検討した研究は今日までに数多くなされてきている。

その理由として、高校生や大学生でのふれあい体験学習では対象者がすでに自分の特性やア

イデンティティなどが確立しており、ふれあい体験学習の効果が先に予測されやすいことが挙げられる（倉持 2009）。一方で、中学生はそのほとんどが自身の特性について理解しておらず、その時期に体験したことによってまだ特性が変わる余地が十分にあるために、ふれあい体験学習で獲得するものは大きいと推測される。さらに、日本は中学生までは義務教育であり、日本各地でも学校によって高校や大学のような大きな違いは見られないことから、日本の子どもたちが全身体験できることから、中学生の時期にふれあい体験学習を体験することの効果も期待される。

石川（2013）は、ふれあい体験学習の授業スタイルによって中学生の教育的効果が異なることを、ふれあい体験中の中学生の語りから調査した。他にも、大学生集団が幼稚園を訪れて幼児の集団と自由に遊んで交流する場面を観察し、幼児にとっての意義に焦点をあてて分析した高塚（2007）の実践では、幼児には「心の安定」「遊びの充実」「他人への関心」「成長への

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院教育学研究科

憧れ」という意義を見出した。だが、これらの研究は乳幼児の年齢について言及されておらず、対象の乳幼児たちの年齢は研究によってバラつきがある。中学生と交流する乳幼児の年齢は、中学生と乳幼児との交流の仕方を変化させるので、乳幼児の年齢がふれあい体験学習に与える影響を考える必要がある。また、先行研究の多くは、ふれあい体験学習に参加する保育者や教師、保護者についても言及されていない。ふれあい体験学習は事前・事後指導を含めた長期の学習であるが、実際のふれあい体験のみの研究が大半であり、カリキュラム全体を踏まえた上で、中学生と乳幼児にとってのふれあい体験学習の意義についても研究する必要があると考える。

以上より、本研究では、乳幼児の年齢が、ふれあい体験学習における中学生と乳幼児にどのような効果をもたらすのかを明らかにするとともに、ふれあい体験学習に関わる保育者や保護者の意識についても明らかにし、ふれあい体験学習全体の内容をどのようにすれば中学生と乳幼児に意義のある交流にできるのかを考察するために、Y市で行われたふれあい体験学習事業のエピソード記録とアンケート、インタビュー分析を基に検討する。^注

2. 研究の対象と方法

(1) 対象

X県Y市のZ児童館と地元のA中学校が合同に行っている保育体験において、体験者である中学3年生の生徒2クラス（A組:41人、B組:36人）とその保育体験でふれあう乳幼児、乳幼児の保護者と児童厚生員の以上を対象にする。

7月のふれあい体験前に児童厚生員と家庭科教員による2クラス合同の事前指導を行い、教師たちは普段、乳幼児とふれあう機会の少ない中学生たちに視覚や触覚を使って乳幼児を理解させる。Y市の保育体験は、A組は乳児を対象にしたお世話体験を行い、B組は幼児を対象にしたあそび体験を行った。どちらの組がお世話体験をするか、あそび体験をするのかはA中学校の家庭科教員が決め、その内容については児童厚生員が決めている。ふれあい体験後に中学生はA中学校で家庭科教員によって事後指導が行われ、ふれあい体験での感想や意見をZ児童館が用意したアンケートに記入して、その内容を児童厚生員たちが読み、次回への改善点としている。

(2) データ収集・分析方法

データ収集としては、Y市でのふれあい体験学習では

①中学生と乳幼児の保護者のそれぞれにアンケート調査を行う。

このアンケート調査は中学生に対して事前・事後2種類と乳幼児の保護者に対して1種類ずつ計3つのアンケートから結果を分析する。中学生への質問項目は、結婚・出産の希望などに加えて、「対児感情」3項目、「乳幼児理解」3項目、「学習意欲」2項目「将来設計」2項目から成る。この内、「対児感情」3項目、「乳幼児理解」3項目、「学習意欲」2項目は七木田(2004)が中学生に対して行ったアンケートを基に作成した。

「対児感情」項目

1. 自分は赤ちゃんなど小さい子どもが好きである
2. 赤ちゃんと一緒にいると楽しい
3. 赤ちゃんに興味や関心がある

「乳幼児理解」項目

4. 自分は赤ちゃんの気持ちがわかるほうだ
5. 自分は赤ちゃんを喜ばすことができるほうだ
6. 赤ちゃんについて十分に理解している

「学習意欲」項目

7. もっと保育体験の授業をしたい
8. 授業以外でも保育体験をしたい

「将来設計」項目

9. 将来、結婚してみたいと思う
10. 出産・子育てをしてみたいと思う

②ふれあい体験の前に中学校で行われる事前授業を非対流的観察する。

③中学生と乳幼児とのふれあい体験場面を観察し、中学生は「対児感情」「幼児理解」「学習意欲」の変化やあらわれた場面、乳幼児もそれぞれの場面においてどのような行動や態度をとったかなどをエピソード記録として残す。

②、③における観察では、参加する中学生や母子には大学から来た学生という説明をして、乳幼児と中学生の交流の妨げにならないように距離を保ちつつ、両者の関わり方や会話が確認できる程度に観察した。観察は対象への観察者からはたらしきを最小限にとどめる非対流的観察(中澤 2001)を用いた。また、両者の会話については、手書きの観察のみでは記録しきれない可能性があるため、児童館と中学校に許可を得た上で、ICレコーダーと手書き記録とカメラ

によって記録した。

④ふれあい体験学習後に、Y市の児童厚生員に対してグループインタビューを行い、職員から中学生と乳幼児とで交流する意義・目的と、その目的に対してふれあい体験学習をどのように作っているのかを調査した。グループインタビューは11月9日(月)に10:00~11:30の間、Y市児童館で行った。対象は児童館に20年間勤務している女性1人(職員A)と17年勤務している女性1人(職員B)、以前ふれあい体験に参加したことのある女性1人(職員C)の計3名である。ここでは、ふれあい体験学習を計画している職員たちから単独インタビューでは聞き出せない幅広い情報内容を聞き出すために、グループインタビュー法を選択した。

次に、Y市のふれあい体験の分析方法として

①中学生に行った事前・事後のアンケート結果を集計し、ふれあい体験前後で中学生に「対児感情」「幼児理解」「学習意欲」のどれかに変化が生じたのかを分析する。また、お世話体験をした生徒集団とあそび体験をした生徒集団を比較し「対児感情」「幼児理解」「学習意欲」の変化に違いがあるのかも分析する。

②ふれあい体験場面のエピソードから、アンケートで得られた結果の実例を見つけ出す。それにより、具体的にどのような体験が中学生や乳幼児にとって意味のあるものなのかを分析する。

③Y市の児童厚生員に対して行ったグループインタビューから、ふれあい体験に対してどのような目的があるのかを聞くとともに、中学生と乳幼児への効果もグループインタビューから分析する。

3. 結果と分析

(1.1) 中学生へのアンケート調査

ふれあい体験前後で行ったY市のA中学校の中学3年生2クラスを対象にしたアンケート結果より、ふれあい体験事業全体の効果を分析する。

初めに、「対児感情」の3項目であるが、ふれあい体験前よりふれあい体験後では3項目とも肯定的な回答が増えた。中でも、「赤ちゃんといると楽しい」「赤ちゃんに興味や関心がある」という項目が顕著な変化があった。以上から、中学生は乳幼児と交流することによって、それまでに抱いていた乳幼児に対するイメージや感情が変化することが示唆される。(図1)

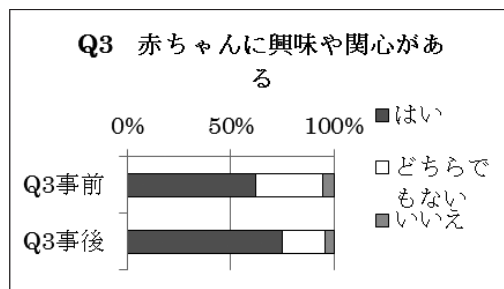
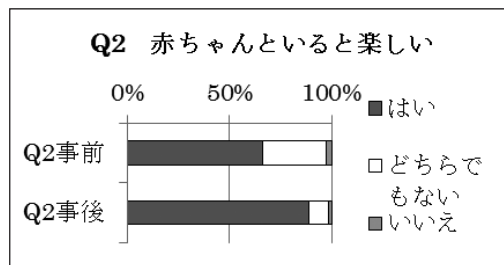


図1 対児感情(乳幼児への肯定感, 興味関心)

次に、「乳幼児理解」の3項目は全項目プラスの回答が増えた。中でも、「赤ちゃんについて十分に理解している」という質問は著しく増加した。このことから、数回の乳幼児との交流でも、中学生は乳幼児に対する理解をすることが可能であることが示唆される。また「学習意欲」の2項目も肯定的な回答が増えた。(図2)

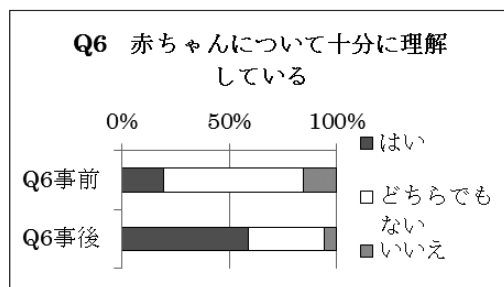


図2 乳幼児理解(乳幼児に対する意欲や知識)

しかし、「将来設計」の2項目の内「将来、結婚してみたいと思う」の回答は他の回答と比べると増加率が低いことが分かった。この結果から、乳幼児との交流は、中学生にとって結婚や子育てとの直接的な関係は薄く、中学生は弟や妹と接するように乳幼児と交流していたと推測する。(図3)

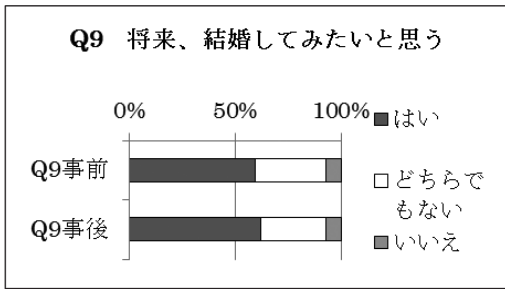


図3 将来設計（中学生自身の結婚・子育て願望）

(1.2) お世話体験とあそび体験

次に事前・事後アンケートから、お世話体験とあそび体験の違いによって中学3年生A組とB組の意識がどのように変化したのかを比較し、「対児感情」「乳幼児理解」「学習意欲」「将来設計」の項目を中心に分析する。

お世話体験とあそび体験を行った生徒は、共に「対児感情」「乳幼児理解」「学習意欲」「将来設計」の全項目で肯定的な回答が増えた。しかし、あそび体験を行った生徒は「学習意欲」の項目でお世話体験を行った生徒より肯定的な回答が増加していた。このことから、中学生にとってお世話体験とあそび体験では、その後の保育体験の意欲に違いが生じることが明らかとなり、中学生は遊びを通して乳幼児と交流するほうが、その後の保育体験に対する意欲が強くなると推測される。(図4)

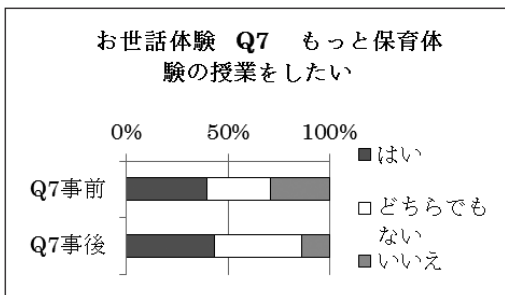
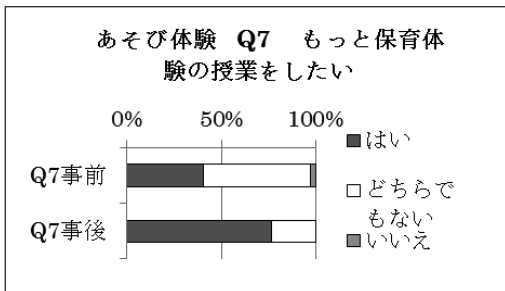


図4 学習意欲（ふれあい体験学習への意欲）

(2) ふれあい体験学習のエピソード分析

【エピソード 1】事前指導でのやりとり

6月10日（水） 15：00～15：50

事前指導 中学校体育館



体験コーナーで、赤ちゃん人形を抱いた後に本物の赤ちゃんを抱いた時の場面。中学生Aがぐずり始める赤ちゃんに困り、隣の友人に助けを求めるが、友人もどうすることもできなかった。

児童厚生員「それ、抱き方合ってる？正しい？」

中学生A「え・・・」

児童厚生員「人形を抱く時に言ったよね。まだ赤ちゃんだから首を支えてくださいって」

中学生A「すみません」

赤ちゃん人形を抱いた後に本物の赤ちゃんを抱くコーナーでは、1クラスが円になって順番に赤ちゃん人形と赤ちゃんを回していた。人形の際に児童厚生員が首を支えるかどうかの話をしていたが、本番では中学生はよく理解していなかった。中学生にとって、どの子が首がすわっていて、どの子が首がすわっていないのかを理解できない状況であった。中学生たちはただ渡された赤ちゃんを抱きしめるので精一杯だった。また、人形を抱く際は、相手が生き物ではなかったので、中学生のほとんどに緊張感がなく、まるでボールのように次へ次へと渡していた。その後に、中学生は本物の赤ちゃんを抱いたが、抱き方を間違えている生徒が多く、児童厚生員が逐一中学生の手を動かし、言葉と行動でアドバイスを行っていた。

【エピソード 2.1】中学生Eと中学生Fの成長①

7月15日(水) 10:15~11:30
あそび体験 B & G アリーナ体育館



体育館で男女ペアと幼児が動物園ごっこの際に、ペンギン歩きをしている場面である。夏なので、体育館内も暑く幼児も中学生も汗をかくほどであった。

中学生E「1, 2, 1, 2,」

中学生F「暑くない?これで、涼しい?」(団扇で幼児を扇ぐ)

幼児「暑いー」

中学生E「暑いかー、頑張って」

中学生E(男子)と中学生F(女子)は動物園ごっこの前に幼児の母親が幼児を団扇で扇ぎ、背中をタオルで拭いている様子を見ていた。この場面では、母親の代わりに幼児が暑くないように風を送ろうとしているところである。母親と幼児のやり取りを見て、自ら幼児のことを考えた行動がとれるようになっていた。中学生たちはあそび体験を通して母親の行動から、幼児とのかかわり方を学ぶとともに、幼児と交流することの楽しさを理解しているようであった。また、中学生にとって母親は幼児とのふれあい方を教えてくれる先生のような存在であり、そのような母親の存在がふれあい体験の効果を左右するのではないかと推測する。

【エピソード 2.2】中学生Eと中学生Fの成長②

7月15日(水) 10:15~11:30
あそび体験 B & G アリーナ体育館



中学生EとFの担当した母子には、別に乳児の兄弟がおり、初めは母親は乳児コーナーに行けずに困っていた。しかし、時間が経つにつれて中学生に幼児を任せられるようになった。母親「ちょっと見てくるね、その子お願い」
中学生F「わかりました、いってらっしゃい」
幼児「お母さんどこいくの?」
中学生F「ちょっと弟君見てくるって」
幼児(母親を少し見つめる)
中学生E「ここなに色がいい?」
幼児「青がいい、青好き」

初めは手もつなげなかった子が、終わる頃には膝に乗かって話ができるようにもなった。母親が離れても幼児は不安がることなく中学生と交流でき、中学生も幼児に対して興味関心を持っているように思えた。また、中学生の対応は幼児1人1人で異なっていた。全ての中学生が事前活動で学んだとおりにするのではなく、それぞれが幼児の個性に合わせてふれあい方法を変えていた。

【エピソード 3】中学生と乳児のお別れ

7月7日(火) 10:15~11:15
お世話体験 児童館のホール



中学生たちとのふれあい体験が終わると、ほとんどの乳児が中学生の後ろを追って行った。窓から帰る中学生を見つめたり、玄関まで這って中学生を見送りに行ったり、乳児たちは中学生との別れを惜んでいるようであった。

約1時間のふれあい体験の中で、中学生と乳児たちの間に関係ができていたことが推測される。長期間でのふれあい体験では、中学生は幼児に対して兄弟姉妹や子どもに湧く愛しさが芽生え、幼児は中学生に対して兄弟姉妹や保護者のような安心感が芽生える(高塚2007)が、短期間のふれあい体験でも同じことが言えると考えられる。

【エピソード 4】中学生と幼児のお別れ

7月15日（水） 10：15～11：30
あそび体験 B & Gアリーナ体育館



お別れの場面では、幼児が自分と遊んでくれた中学生のところへ行き、手を振ったり抱っこをしてもらったりしていた。中学生は1人1人母子のメッセージ付きのメダルをもらい体育館から出て行こうとしたが、手を振り続ける幼児から目を離すことができずに入り口で立ち止まる生徒も多かった。

あそび体験でも、約1時間のふれあい体験の中で、中学生と乳児たちの間に関係ができていくことが推測される。お世話体験では、乳児が帰る中学生を見つめるだけだったが、あそび体験の幼児は声を掛けて手を振るので、中学生も何度も何度も振り返りながら中学校へ戻って行った。中学生全体と幼児全体が交流するわけではなく、特定の中学生と幼児同士が交流することで、お互いに交流する対象を明確に把握できていたと考え、倉持ら（2011）の先行研究で言われた中学生と乳幼児のペアでの交流の効果が再確認された。

(3) ふれあい体験学習へのZ児童厚生員意識、考え方

11月9日（月）の午前10時から11時30分の約1時間30分の間、Y市のZ児童館において、研究者が3人の職員に対してグループインタビューを行った。そこで、Y市の児童厚生員からふれあい体験において中学生と乳幼児とで交流する意義・目的と、その目的に対してふれあい体験をどのように計画しているのかを調査した。

その結果、①児童厚生員の目的と学習内容、②乳幼児の効果に関する児童厚生員の関心、③児童厚生員の考えるふれあい体験の改善点の3点について示唆を得たので書き示す。

①児童厚生員の目的と学習内容

初めに、ふれあい体験学習における児童厚生員の目的意識に関して調査した。

インタビュアー：ふれあい体験で中学生に何を学んでほしいですか？

職員A：ふれあい体験をとおして一番に伝えたいことは、命の大切さです。最近はいじめや自殺で中学生が命の大切さを知らないのだと思います。ふれあい体験の中で、自分より小さな命もあるということを知って、命を大切にしてほしい。

ふれあい体験の目的の1つは、中学生に命について考えさせることである。近日のいじめや自殺の事件から、職員たちはこのような目的を立て、現代の中学生へメッセージを伝えようとしていた。

職員A：初めは中学校や高校の家庭科の授業の宿題で乳幼児さんとふれあう機会を設けていたんですけど、それだと保育士さんになりたいとか子どもが好きって子しか来てくれないので、興味がない子にも体験してもらった方がいいのかと思って・・・（中略）・・・中学生さんたちには親への感謝の気持ち、自分は大切に育てられているんだなーっていう気持ちに気付いてほしいと思っています。

ふれあい体験の目的のもう1つは、中学生が乳幼児とふれあうことによって、自分が幼い頃に保護者や周りの人に大切に育てられたことに気付き、親へ感謝することであった。そのために、児童厚生員は、ふれあい体験は、子どもが好きな生徒も苦手な生徒にも行ってもらった方がよいと思っている。この目的から、Y市でのふれあい体験では乳幼児の保護者にも参加するように促しており、中学生の目の前で乳幼児を世話する場面を見せようとしていた。

②乳幼児の効果に関する児童厚生員の関心

次に、ふれあい体験は中学生と乳幼児にとってどのような効果があるのかについて、児童厚生員の関心を調査した。

インタビュアー：ふれあい体験における中学生への効果、または乳幼児への効果というものは何か経験上から感じますか？

職員C：効果，中学生と乳幼児への。

職員A：あんまり考えたことはなかったね。

職員B：乳幼児への効果は気にしていなかったね。

今回のふれあい体験においては、乳幼児への効果に関しては考慮されていなかったことが明らかになった。中学校からの要求という考えが前提にあるために、中学生への効果ばかりに気を取られており、乳幼児への効果に関する発想がそもそもなかったと推測される。

③児童厚生員の考えるふれあい体験の改善点

最後に、児童厚生員が中学校やふれあい体験に対して思う課題について調査した。

職員B：中学生さんたちがゆっくりポンポンって叩いてあげながら、声をかけてあげる姿は成長してるなーって見てて思います。ただ、時間が押している時はどうしても中断しないといけないから辛いですね。

・・・(中略)・・・

職員A：どうしても中学校の授業ですから、時間がないんですよ。自分たちももっと時間があればなーとか、もう少し一緒に居させた方が良さそうだなーって思うことはあります。中学生さんも乳幼児さんも盛り上がったところでおしまいですからね。

・・・(中略)・・・

職員A：中学校との連携がとれないことが多くて、家庭科の先生は非常勤でたまに学校にいないことがあって、ふれあい体験学習の打ち合わせもなかなか進まなかったですね。それに校長先生にもお話ができなくて、なんか勝手にやってるけど大丈夫かなーって思っていました。

ふれあい体験に対する児童館からの問題として、時間が少ないという意見だった。限られた時間の中で、計画通りに実施しようとする中学生と乳幼児のふれあいを中断してしまうことも考えられる。その時間も中学校のカリキュラムによって減るので、中学校と児童館とで連携して計画を立てた方が良くと思われる。

4. 総合考察

本研究は、乳幼児の年齢が、ふれあい体験学習における中学生と乳幼児にどのような効果をもたらすのかを明らかにするとともに、ふれあい体験学習に関わる保育者や保護者の意識につ

いても明らかにし、ふれあい体験学習全体の内容をどのようにすれば中学生と乳幼児に意義のある交流にできるのかを考察することを目的とし、結果として、中学生は乳児と幼児ではふれあい体験後の効果に違いが表れ、今回のふれあい体験学習では幼児体験（遊び体験）を行った生徒のほうが学習意欲や幼児理解の指数が高いことが分かった。また、先行研究では見られなかった乳児と幼児の年齢による交流の違いや、それによる中学生への効果の違いが明らかとなった。

本研究の意義について以下の点が挙げられる。まず1点目は、中学校と乳幼児のふれあい体験学習では、先行研究と同様に中学生に対して教育的意義があることだ。先行研究では、ふれあい体験学習を通して中学生は自尊心や幼児理解などが上昇することが調査されており（佐藤 2004）、本研究においても乳児体験を行った生徒も幼児体験を行った生徒も学習意欲と乳幼児理解、対児感情が上昇することが分かり、先行研究を裏付ける結果となり、また、ふれあい体験学習が結婚や出産願望に繋がらないことも新たに示唆された。

2点目は、母親や保育士などの存在が中学生と乳幼児のふれあい体験を左右することが示唆された。ふれあい体験の際に、中学生と乳幼児の交流が上手くいっていない場面が多く見られた。事前指導を行ってはいしたが、本物の乳幼児を前にすると中学生は積極的に交流できなくなり、乳幼児も見知らぬ存在に警戒をしていた。しかし、その際、一緒に参加した母親や保育士たちの行動が中学生と乳幼児の交流を円滑にさせ、ふれあい体験を成功させるのに貢献した。初め中学生は自分の知識で乳幼児と交流しようとして上手くいかず、今度は乳幼児と母親の交流を観察し始めた。事前指導で習った交流方法は一般的で基本的な内容であり、その方法が確実に通用するわけではない。乳幼児1人1人にあった交流方法があることを中学生は見て、知ってから体験を再び始めた。Y市のふれあい体験では時間が少ないながらも、半数の生徒は初めの頃とは違い、母親を真似た方法で乳幼児と交流していた。つまり、ふれあい体験学習を成功させるためには、中学生と同等数の母親や保育士などの中学生の目標となる存在が必要不可欠であると考察する。

最後に、3点目として、ふれあい体験学習全体の時間を増やし、送り手（中学校）と受け

手（保育施設）の事前事後の連携を強化することで、より意義のあるふれあい体験学習にすることが示唆された。先行研究（七木田 2004）でも明らかになっているように、送り手と受け手との連携ができていないと、目的やふれあい体験の時間配分がうまく調整できずに、結果として、ふれあい体験自体に影響が及んでしまう。

注

本研究では、平仮名で「ふれあい」体験学習と明記する。理由としては、漢字で「触れ合い」と記述する際に、単純な身体での触れ合いが強調されてしまう。だが、ふれあい体験学習は単純な身体での触れ合いだけではなく、中学生と乳幼児の距離や心も含めた交流であると考えられる。よって、本研究では、「ふれあい」体験学習と明記する。

引用参考文献

- 1) 石川敦子 (2013) 「中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 **11**, pp.153-160.
- 2) 伊藤葉子 (2006) 『中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習』 風間書房.
- 3) 伊藤葉子 (2007) 「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」『日本家政学会誌』 **58**, 6, pp.315-326.
- 4) 川島隆太 (2004) 『高齢者が子どもの「脳」を育てる』 学習研究社.
- 5) 倉持清美, 伊藤葉子, 岡野雅子, 金田利子 (2009) 「保育現場における中・高校生のふれ合い体験活動の実施状況と受け止めかた」『日本家政学会誌』 **60**, 9, pp.817-823.
- 6) 倉持清美, 金子京子, 阿部睦子, 妹尾理子, 望月一枝 (2011) 「ふれ合い体験の内容による中学生の学びの特徴異なる関わり方からの検討」日本家庭科教育学会 第54回大会 (2017年3月9日閲覧)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhee/54/0/54_0_85/_article/-char/ja/
- 7) 松村京子, 大路雅子, 山口香織 (2002) 「幼児との交流時における高校生の対児行動—

対児感情と性別による違い—」『小児保険研究』 **62**, 1, pp.66-72.

- 8) 文部科学省 (2006) 『幼児教育振興アクションプログラム』 (2017年3月9日閲覧)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/07121721/001.htm
- 9) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領』 (2017年3月9日閲覧)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/chu/gika.htm
- 10) 中澤潤, 大野木裕明, 南 博文 (2001) 『心理学マニュアル 観察法』 北大路書房.
- 11) 七木田敦 (2004) 「中学生と乳幼児の交流が相互の発達に与える効果に関する研究—保育者による次世代育成をめざした子育て支援プログラムの立案と実施—」子ども家庭総合研究事業 成果報告書.
- 12) 佐藤洋美 (2004) 「乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響」『日本生活体験学習学会誌』 **4**, pp.35-54.
- 13) 瀬之ロスマ・山下公子 (1965) 「高等学校における保育教育の研究 I—「家庭一般」と「保育の現状」—」『日本家庭科教育学会誌』 **8**, pp.17-22.
- 14) 高塚人志 (2007) 『いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業』 大修館書店.
- 15) 寺田清美, 小泉佐江子, 田中規子 (2013) 「大学生の「赤ちゃん体験」についての調査と分析—「接触体験」と「観察体験」の有効性—」『東京成徳短期大学紀要』 **46**, pp.23-38.
- 16) 吉岡良江 (2010) . 「幼児理解をめざした中学校家庭科の授業実践研究」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 **30**, pp.69-75.

謝 辞

本研究に参加していただいた児童館と中学校の皆様へ深く感謝いたします。また、調査を実施するにあたり、ご指導をいただいた広島大学幼年教育研究施設の職員の皆様へ感謝申し上げます。